

3 けーたい ケータイ

けーたい ケータイ

「ふあ あああ」

目を開けたら、まだ暗いミボ。『梅雨』っていう、寝苦しい季節はまだ先らしいのに、なんでこんな時間におきちゃったミボ？ まあ、いいミボ。もうひと眠りするミボ。

そう思って目をつむったら、外でなにか音がするミボ。まさかとは思うけど ベッドでは、ほのかにぐっすり寝てるミボ。間違いで起こしちゃかわいそうミボ。

わたしはちよつとだけ元の姿に戻って、障子を開けようとしたミボ。そしたら、障子の向こうから、へんな声が聞こえてきたミボ

「お水、お水」

おみず？ なに言ってるミボ？

「お水、お水、ひっひっひっひ」

な、なにミボ、この笑い声は!?

——ち、ちがうミボ。これは、ドックゾーンのしわざなんかじゃないミボ。こ、こっちの世界の、おばけミボおーっ!!

ふあ 眠う〜いい〜。

もう、メッブルったら。夜中に『水があ〜』なんてさわぎ出すんだから。お世話のカード色々使ってもさわぐから、病気かと思つたら 寝ぼけただけ、ですって!?! ああ、睡眠不足は乙女の敵だあ〜。

クロスによつかかつて眠れるくらい満員電車にゆられて、改札までの人の波に流されて。うとうとしながら歩いてると、気持ちいい風がきた。

目を開けたら駅の外。上には青空に白い雲。ああ、なんかいいな。こっ、朝』って感じの朝。

「ふわぁあ〜あっ」

とと。いけない、いけない。うっかりあくびが出ちゃった。思わず目だけでまわり調べて 知ってる人、いないわよね？ あの人に見られたりしたら、きょう一日、真っ暗になっちゃおうよ

「み〜た〜ぞおお〜」

うひゃあつっ!! な、な、なに!?

「へへ。おはよ、なぎさ」

あ、なんだ。志穂に莉奈じゃない。

「脅かさないでよあ」

ふたりとも、笑いながらわたしの肩たたいた。

「あれ、なにになになに? それ、ケータイじゃない」

え?

志穂があたしの腰のあたりを指さしてる。指の先を見てみたら あれ、ほんとだ。メッブルがいるポシエットと別に、ピンク色のころん、としたのがぶら下がってるよ。

「ケータイ だよね、これ?」

言いながら、指先でつんつん、ってつついてみる。間違いない、みたい、だけど。

「なーに寝ぼけてんの。自分のでしょ?」

うん。あたしのスカートについてるんなら、あたしんだよね。普通。でも、こんなの持ってたっけ?? 頭ひねってたら、いきなり腕が動かなくなった。あたしの両ひじ、だれかに って、莉奈あ!?

「志穂お〜、それ、とっちゃえ♡」

ちよ、ちよつとあ!

「うふふふ。さあー、だあれの番号お入ってるっかな」

な、なんですつてえ〜つっ!?

「ちよ!ば、ばか!やめなさいよ!! そもそも、それあたしんじゃないんだからっ!!」

あ、歯で笑ってるよ。こいつは。

「シシシ そーんなこと言っただーめ」

「志穂。名前、名前チェックして。男の子の名前な

5 けーたい ケータイ

「い？」

もう！信じてないな、ちくしよあ。

「だめよあ。名前だけ女の子にしてる、ってこともあるんだから」

「だれがするかつ！浮気隠してるオジサンじゃないんだからっ！」

「いーかげんにしないと、怒るわよ!!」

「朝からなに怒ってるの?」

「莉奈の手、振りほどこうとしてたところに、おおきなおでこが、ひよい、って割り込んできた。」

「ほ、ほのかあゝ ヘルプっ」

「ああ、きよとんとしてるよ。ん〜と」

「あ、ねえねえねえ、雪城さんも見る? なぎさのケータイ」

「なぎさの? どれどれ?」

「ほのかあゝ。あんたも敵かあゝ」

「あら? 番号にも入ってないみたい」

「え?」

「うおっとうと。莉奈ったら、あたし放り出して体乗り出してるよ。」

「あれえ、からっぽ? うわっ!」

「志穂、じゃま。と。あ、ほんとだ、画面まっしろ。」

「なぎさあゝ。どういて〜」

「あたしのおなかの下から、じたばたしてる志穂のつぶれた声。えゝい、もちよっと押してやるう」

「お?」

「も、そのへんにしてさ。早く学校いこか」

「あれれ? 両肩が持ち上がってく また莉奈だ」

「なあ?」

「じゃ、先にね〜」

「ああ、ちよっと浮いたスキに、志穂が逃げてっちゃった。ケータイ、あたしのポケットにつっこんで。」

「覚えてなさいよあっ!!」

「あゝ、助かったあ。へんな番号入ってたらどうし

ようかと　ん？　ほのか、なにやっつてんの？

「さあ、どんな番号入ってるかしら♡」

ええっ!!

「ち、ちよつと、ほのか!? あんた今、なにも入ってないって言ったばかりじゃ」

「うん？　ちよこちよこ、つてさわって、セキュリティモードにしたらだよ」

「え!?!」

ちよこちよこ、つて

「慣れると、けっこう簡単よ」

さっすがほのか。でも、あれ？　たしか

「慣れる、つたつて　ほのか、ケータイ持ってたっけ？」

言ったとたん、にやーって笑ったわ。そのまま上着のすそ、ちよつとめくつたら　あれ、おんなじケータイ!?!

「わたしもね、気がついたらスカートについてたの。ここに来るまでに、使い方覚えちゃった」

あたしは、ほのかの手の中とスカート、かわりばんこに見つめちゃった。このケータイ、なに??

*** **

なぎさといっしょに教室に入って、席にカバン置いてたら、なにか視線を感じた。その方向ちらっと見ると、みんな変な顔してわたし見てる　ううん、わたしと、なぎさ見てるわ。なにかしら？

「ねね、なぎさと雪城さんって、同じケータイじゃない？」

「つていうか、雪城さんが堂々と校則破るなんて、ねえ？」

コソコソ、つて声がして、視線の正体がわかった。まあ、いいか。言わせておけば。

「やつぱさあ、最近なぎさとつきあってるのが、ねええ？」

——前言、撤回。

7 ケータイ ケータイ

「言いたいことがあるなら、はっきりわたしの顔見て言いなさい！」

立ち上がって、チラチラ見てた子の方に歩いていったら、いきなりおなかが重くなった。

「ほ、ほのか」

見なくてもわかってる。なぎさがおなかにしがみついているんだわ。しかたないから、わたしはその場でさっきの子を見据えた。

「さあ！」

ああ、みんなして、背中向けちゃったわ。もう、だまるくらいなら言わなければいいのに。

「あたしは、別に構わないから」

おなかの下から、なにか聞こえてくるけど、そういう問題じゃないわ。

「なぎさは黙っててー！」

「ほ、ほおのかああ」

うーん、そういう声出されちゃうと、ねえ。

わたしが困ってたら、ちょっと遠くから声が出た。

「だ〜めだって、むきになっちゃ」

え？ むき、って わたし？

振り向くと教室の入り口から、ラクロス部の高清水さんたちが近づいてきた。

「なぎさ、ちょっと雪城さん借りるね〜」

「え？ ちょっと、莉奈？ 志穂!?!」

ちょこちょこ、って近づいてきた久保田さんがなぎさの手をほどいて、高清水さんがわたしの手を引っぱって 気がついたら、教室がはるか後ろに見えてた。

「あと、よろしくっ♡」

もうちょっとで予鈴だから、廊下には人が少ないな。

そう思いながら手を引かれてたら、高清水さんが急に曲がった。なんだ、トイレいくのね。もうちょっと、変わったところに行くのかと思ってたのに 体

育館うらとか。

「ありがとね」

いきなり清水さんが言っつて、わたしはわれに返つた。となりで久保田さんも、にこにこうなずいてる。

「え、と なにが？」

「なぎさつてねえ、人気者なんだよ」

「そつそつそつ。誰でもすく仲良くなるしい、カ
ラツとしてるしね」

うん。それはよくわかるけど ふたりとも、な
んだか苦笑いしてるわ。

「だからね、よくあるのよ。あーいうヒガミ」

へえ。けつこう苦労してるんだ。なぎさ。

「でもでもでも！こんなはつきり怒つた」つて、は
じめてだよー！」

え？

「普通の口は黙つちゃうもんねえ。逆にベタベタし
だすコもちよつと だけど。」

「なのになのに。自分のことは平気でも、なぎさのこ

と言われたらいきなり怒りだしちゃうんだもんねー。

うんうん」

二人ともにこにこしながら、わたしの肩をたたいて
るわ。久保田さんなんか、わたしに頭くつつけちゃつ
て、ほんとに嬉しそう。

「それよりそれより！このケータイ!!」

久保田さんがいきなり顔上げたと思つたら、携帯
持つてた。わたしの腰についてたの。

「そつそつ。なぎさと同じケータイ持つてるなんて
なんか、怪しいわね」

清水水さん、いたずらっぽく目で見てるわ。え、
と。ちよつと、ごまかせないかもしれないわね。

「りくな。ほのかちゃん、困ってるよ？ そんなイ
ジメないの。」

とりあえず、ケータイはどこかに隠しとこ。ほら、
なぎさのこも」

あら？ いつの間にか??

「へへへ。カットだったら、なぎさよりあたしの方

「が上だも〜ん」

ほのかたちが教室に戻ってきたら、すぐホームルームになった。声かけるひまもなかったな。ま、いいけど。

けど、ほのかって結構、好かれるタイプなんだなあ。出てっからどうやってフォローしようか、って思ってたのに。気がついたらみんなして、あたしついついてるんだもん。

『どうやってそんな仲良くなれたの?』なぐんで。くやしーいから、絶対教えてやらないんだ。ほのかには。ポケットのケータイはいつの間にか消えてる

志穂だな。さすがに授業中に持ってちゃヤバいから助かったけど。でも、ほのかに変なこと吹き込んだりしてないでしょうねえ？

「すみさん、美墨さん！ 25ページ、お願いね」

「あ、は、はいっ!」

いけないいけない。まるつきり聞いてなかったわ。ええと、現国の25ページ、っと。

「あめつちの、わかれしときゆ、かむさびて」

「ストゥップ! 美墨さん、いつたいなに読んでるの? 今はホームルームよ?」

あ。

あ〜あ。爆笑されちゃったよ。あはははは。って、ほのかまで笑ってないでよねー。あんたのせいも、ちよっぴりあるんだから。

「午後の授業で使うから、お昼に資料25枚、取りに来てね、って言ったのよ? もう、しっかりしてね」む〜。そんなこと、なんであたしに言うんだらうなあ。まったく。

「はあい」

って、とりあえず返事して座ったのに、先生まだあたし見てる。なにかと思つたら、いきなりチョークで黒板の端っこをコンコン

「号令もおねがいね。日直さん？」

いっけない。そうだったっけ。

「あ、資料取りに行くの？」

お昼休み。理科室に行ったら、ほのかがひとりで紅茶飲んでた。いいかげん慣れてはきたけど、フラスコのポットにピーカーのカップでなごんではうん。

「なに？ 難しい顔しちゃって」

この子とつきあっていると、ほんと、常識変わっちゃうな。ま、いつか。それがほのかだし。

「なんでも。で、もう終わったの？」

昼休み中に、薬品のチェックしちゃうんだ、って言ってたもんね。

「うん、いま休んでたところ。ちょっと待ってて。紅茶飲んじゃうから」

ピーカーに顔近づけて、ふーふー、って冷ましてる。そんな姿みてる、なんだかあたしまでのーんぶりしちゃうな。

「急がなくていいって。 あー、そういえばさ、あたしのケータイ、志穂が取ってたんじゃ？」

ほのか、え？ って顔でこっち見てから、うんうんうなづいて、

「そうよ。ラクロス部の部屋に、って言ってくれたんだけど、授業が始まりそうだったから、この机の中に」

実験机につっこんでゴソゴソやってた手が、ぴたっ、と止まった。

「どしたの、ほのか？」

目がまんまるくなってるし。こんな顔、珍しいわ。

「ケータイが」

机の上に、朝のケータイがひとつ。手を入れてみたひとつ。うん。これで揃った。って、また手入れている!？」

あたしも机の中に手を入れた。ほのかの手ごとにごって、机の上に出して。これって、まさか
「ぶえてるうっ!?」

「うーん」
念のため理科室の入り口にカギかけてる間、ほのかは実験机の上でケータイ調べてた。上から、横から、ひっくり返してまた下から

「どう、ほのか?」

声かけてもしばらく調べてたけど、両手にぎって、そのままうーん、って伸びして、

「うん。たぶん、だけど 生殖機能はないみたいなのよね」

なっ!?

「なにバカなこと言ってるのよっ!」

「なになに あ、なぎさったら、変なこと考えて

たでしょ?」

あ、だめだ。顔あつくなくなっちゃってるのがわかる。

「生物かどうかが、一応確認しなくちゃね」

おっきなガラスのボールに、ケータイ入れてじっと見てるわ。なにやってるんだろ?

「夜中にね、ミップルが、お水って言ったの。気になるのよね」

そういえば、メップルもミップルも、まだ起きないみたい。そっか、お水ねえ って、

「ちよつと待って、ほのか。それは、なに?」

振り返った手に、ひまわり柄のジョウロ。きよん、って顔であたし見てる。

「お水でふえるかどうか、実験してみようと思って」
にっこり笑って言ってんじゃないわよ。

「却下!」

む、っ、っていつ顔をちよつとだけしてから、ほのか
がまたボールに向かった。

「常識を振りかざす人々をふり切って、科学者は実

験にいそしむのでした よっ」と

「ころっ!!」

それじゃ、あたしが悪者じゃないのよ!

「きゃー。たすけてー♡」

喜んでんじゃないわよ。まったく。ま、でも、

おかげで少し怖くなくなっただけかな。ありがとね。

コピーする資料を受け取ってるなぎさを、わたしは職員室の前でしばらく待ってた。まどの外は朝と同じ、いいお天気。

ちよこつとだけ見える校庭には、いくつかのグループがボールで遊んでる。校舎うらの方はいくつかおしゃべりの輪があったり、木陰でぼーっとしてる子がいったり。いままでのわたしも、きっとこの中のひとりだったんだろうな。

でも。

「ミッブル、ミッブル?」

ポケットをちょんちょん、つてつつきながら小声で呼んでみたけど、起きてこない。いくらなんでも、眠りすぎよね。熱とかはないみたいんだけど

気がついたら、無意識に反対側のポケットついていた。これも心配のタネよね。

理科室でふえちゃったケータイ、ポケットの中ではまだひとつだけ。まだ調べたいから、つてなぎさとひとつづつ持って、ふえたひとつはガラスビンに閉じ込めて。でも、これでもふえちゃったらどうしよう? 調べたいのはわたしの我がままだわ。危険なことになる前に、壊しちゃったほうが

「おまたせ、ほのか。じゃ、コピーに行こ?」

ああ、いけない。目の前なのに、なぎさが出てきたのに気がつかなかったわ。それにしても、なぎささったら資料のことだけしか考えてないみたい。一応、注意だけはしとかなないとね。

「ねえ、まだ、ひとつ?」

ポケット指さしながら訊いてみたら。

「ん？ うん。そうみたい」

あゝあ、やっぱり忘れてる。

「だゝいじよぶだつて。いざとなつたら、踏むなり
焼くなり、どうでもできるよ」

なぎさだったら、気楽に言ってくれるわね。ふう。

やっぱり、あんまり深くは考えられないのかなあ。

そう考えてたら、なぎさがいきなり歩き出した。

「なんてね。あたしひとりじゃ怖くて捨てたいとこ

だけどさ、ほのかも持つてるんだもん。最後まで、つ

きあつからね」

そう言いながら、ぱりぱりかいてる頬が少し赤い

わ。また前言撤回。頼りにしてるね、なぎさ♡

放課後。莉奈や志穂といっしょに部室で体操着に
着替えてたら、着替え畳んでる莉奈がとなりから声

かけてきた。

「なぎさ、あんたそれ持って走り回る気？」

指さしてる先は、あたしの腰のどこ。やば。アン

テナがちよこつと出ちやつてるよ。

「あははは やっぱ、無理かな？」

テレ笑いしてみたけど、莉奈、しぶい顔しちやつ

てる。

「先輩にどやされても知らないからね」

まあ、逆だったらあたしもそう思っしね。でも、ど

うしよう？ 置きっぱなしでふえても困るし

って考えてたら、目の前に見慣れたアミが出てきた。

「はい、はいはいはい。だいじなのはわかってる

から、今のうちに預けてきなよ」

横見たらクロス構えた志穂が、あたしの顔のぞき

込んでた。

「でも、今から行くと遅れちゃうし」

「そのくらいは、あたしたちが言っとくからさ。ほ
ら、行ってきなつて！」

うわっ、とっとと　　言いながらふたりしてぐいぐい押すんだもん。あ、更衣室から出たたん、背中ドア閉まっちゃった。

「しかたないなあ。甘えとこっか。」

理科室は、静かだった。あれ？化学部お休みなんて、聞いてないのにな。

考えながらとびら開けたら、広い教室の真ん中、ほのか。なんだか、いやな予感がする。

「ほのか？」

返事は、声じゃなかった。ほのかの右手が、机の上を指さしてる。

見たら、おおきなガラスピン。お昼休みにケータイ入れといた　　でも、

「ない　　ね？」

おそろおそろ、訊いてみた。ほのかの目がマジだ。

まさか、ホントに消えたの？

「それだけじゃ、ないのよ。」

やっと口開いてくれたと思ったら、また指だけになにかさしてる。あ、あれ？

「ぬれてる？」

机の上から床の上、ずくと行つて窓まで。ゆっくり動かした手の先が、道みたいにぬれてる。

「実はね、お昼休みにわたしが来たときも、やっぱり床がぬれてたのよ。なにかこぼしちゃったのかな、って思ってたんだけど　　」

うん。ほのかの目見ながら、あたしはうなずいた。イヤなもの、思い出しちゃったよ。

「それで思い出した。あたしのことだよ。朝起きたら窓がぬれてたんだ。つきり夜中に降ったんだ、って思ってたんだけど　　」

なにかぬれるたびにケータイがふえたり減ったりなんて、偶然のわけないよね。

ピロリロピロリロ

ふたりでぬれた床見ながら考えてたら、高い音が聞こえた。なに、この音？電話？

「あ、ケータイだわ」

ほのかのケータイが光ってる。けど、別のところも鳴ってるわ。もっと近くで あ、

「あたしのもだ」

「出してみる？」

ほのかの言葉にあたしがうなずくと同時に、ふたりにケータイに指かまえた。せーのっ！

『もしもし』

あたしが話す前に、声が聞こえた。それも二重に。ケータイの中からと、外からと。

「あれ？ほのか!？」

『なぎさ？え？じゃあ、どうして鳴るの??』

首かしげてるほのかと、あたしは目を合わせた。そ

のとき、ケータイから聞こえてきたのは、別の声。

『あれあれあれ？なぎさと、ほのかちゃんなの？』

どーして??』

え？この声

「志穂!？」

『そだよ。なぎさのケータイが置いてあったから、試しにかけてみたん』

置いてあったあ？だって、現にここに あ。

『志穂ちゃん、そのケータイのまわり、ぬれてなかった?』

あたしが言うより先に、ほのかの音が聞こえた。顔を上げたら、ほのかがじつと床見ながらケータイに耳澄ましてる。

ケータイの向こう側からバタバタいう音が聞こえてから、今度は莉奈の声でした。

『うん、部屋の窓がぬれてるみたい。ウチにもニンジャ入ったのかな?』

ニンジャあ？なにすつとんきょうなこと言ってる

んだろ、莉奈ったら。

『あぁー！ なぎさ、ニンジャの話、知らないんでしょ？』

いきなり、また志穂の声。ケータイの取り合いでもしてるのかな？ いやいや、そうじゃなくて。

「ニンジャなんて、信じる方がヘンでしょうが」
『でもでもでも！ めれた布巻きつけてさ、ひょい、って校舎登ってたとこ、見たってはなしだよ？』

え？

『そうそう、理科室のあたりで見たんだって。ほのかちゃん、だいじょうぶ？』

思わず、だまつちゃった。そういえば見たことあるような気がする。柱かなんかに布まきつけて、壁のぼってくの。テレビで、だけど。

それにしても、それでどこ登ったって？ めれてたのは理科室と、あと あ。

「ほのか あたしの部屋、何階だと思っ？」
ちらつと目だけで見たら、ほのかの口元がひきつっ

てた。

「ちよ、ちよつと聞きたくないかもだよねえ。」

『ところで、ほのかちゃん。なぎさのケータイ、どの番号登録されてた？』

まふた、志穂ったら。朝見たくせに、なぐに言ってるんだか。ほのか、消えてるって言ってたでしょうが。

『え〜と』

え!? 思わず顔上げたら、ほのかが笑ってた。にや〜って。

『うふふ。どうしよっかな』

ちよ、ちよつと、ほのか。その、うわ目づかいは、なにっ!!

「ともだちなら。ひみつは共有しなくちゃ。ね♡」
『そうそうそう。ひみつはちゃ〜んと共有しないとダメだよ』

こら〜っつ!! ふたりして、共謀すんな〜っ!!

「だいたい、ふたりともいつの間にかこんな普通に話すようになったのよ!」

『なかよしだもん。ねー、ほのかちゃん』

『ね』

あれれ? 朝はふたりとも、もっとカタかったのに、ま、いつか。なんだか、あたしもうれしい、って!?

ピーッ!ピーッ!ピーッ!

痛ったあ〜っ! なにこの音? 思わず耳から離れたら、あ、あれ? ケータイの画面になにか書いてある。料金不足う!?

『貸しなつて! もあ、志穂が用件早く言わないから

あ、ほのかちゃん? 先輩来ちゃうから、悪いけどなぎさ貸し——』

いきなり莉奈の声になったと思ったら、すぐ切れちゃった。ボタン押しても、ピコっていわないし。

ほんの数分しかしゃべれないケータイ? まさか、ねえ?

ん? なにか、あたしの頭のとこで動いている。後ろむこうとしたら、

「あん。動かないの」

ほのか、あたしの髪どめはずして、リボン結んでるんだ。なんで?

「貸して、って言われちゃったもの。ちゃんと包んであげないとね♡」

ほ、ほのかってば

「あんた、ノリすぎっ!」

帰り道、駅でなぎさたちと別れてから、わたしはいつもの道を歩いてた。

ポケットの中から取り出したのは、あのケータイ。もう使えないし、なぎさは捨てるか言ってたけど

なんとなく、そのまま持ってきてちゃった。帰ったらもうちょっと調べてみようつと。

「でも」

でも、意外だったな。こんなちっちゃな機械ひとつで、人と仲よくなれることもあるんだわ。

ニンジャさん、かな？ よくわからないけど、感謝しなくちゃいけないのかも。

うちの門が見えてきたところで、ケータイはカバンにしまうことにした。おばあちゃんに見つかると心配かけちゃうかもしれないものね。

そうだ。心配といえば、もうひとつあったんだわ。「ミップル、ミップル？ もうおうちよ？」

ケースを取り出したら、すき間からそおつと顔が出てきた。

「おうち　だいじょうぶ、ミポ？」

おどおどして、なんだかリスみたい。なにを怖がっているのかわからないけど

「大丈夫にきまつてるわ。さ、部屋に戻ったらお食事にしませよ」

そう言いながら門をくぐったところで、音が聞こえてきた。

ヒヤッ、ヒヤッ、ヒヤッ

ふふ。懐かしいな。最近あまり聞かなくなった音だわ

「ひ、ひいつつ!!」

あ、あら？ 大きな声といっしょに、ミップルがポシエットごとカバンに飛び込んできちゃった。

「どうしたの!?!」

「やっぱりダメミポ！ おばけミポ！ おばけが笑ってるミポおつつ!!」

そう叫びながら、カバンの奥のほうでふるえてる。

おばけ？　　ああ！

「なんだ。ミップルが言ってたおばけって、この音のこと？」

「いいから早く逃げるミポっ!!」

あゝあ、カバンごとふるえてるわ。ふつぶ。そうね、知らなかつたら怖いかも

「平気よ。これ、蛇口の音だから」

「え??」

ふるえてたカバンが、ぴたつ、と止まったわ。白いポシエットが、少しづつカバンから出てきてる。

「庭の水やりに使う水道なの。もう使わなくてサビちやってるから、回すとこんな音になるのよ」

「それ、なんで夜中に回ったミポ?」

ん? 言われてみれば、そうねえ。おばあちゃまが、水やり忘れてたのかしら?」

門の前で立つたままそんなこと考えてたら、庭の方からなにか走ってくるのが見えた。あ、忠太郎ね。あら? でも変ね。忠太郎、なんでそんなにジグザグに走ってるのかしら??

「忠太郎、ただいま それ、なあに?」

わたしの目の前で忠太郎がお座りした。それはいいんだけど、口元になんだか汚れた 細長い布みたいなものくわえてるわ。布の先はいま来たほう、庭のずっと奥まで続いている。これじゃ、走りにくいはずね。

「もつ、忠太郎ったら。ダメでしょ、いたずらしちゃわたしを軽くたたいたら、わけがわからない、っていう目をしながら、わたしに布を差し出した。片付けて、つて言いたいのかしら。しょうがないわね。」

「忠太郎、どこ行っただい?」

あら、庭の向こうからの声。おばあちゃまだわ。

「ああ、ほのか。おかえりなさい」

わたしはただいま、つて応えながら、庭の方に歩いていった。忠太郎の布を巻き取りながら。あ、あら? この布、ぬれてるわ。巻き取ってたら結構な重さに、なって、——きゃ!

「おとつと。無理しないで、ほのか。わたしでさえ重いんですからね」

布ごと倒れそうになつたわたしを抱きとめてから、おばあちゃまが、手の中の布を取り上げた。かゝるく。「長い布だから、洗つのもひと苦労なんですよ。さ、また洗いなおさないといけないわね」

そのまま、庭のまんなかにある大きなタライで洗い始めたわ。ああ、それであの水道使つてたのね。

でも、夜に？

「ああ、ほのか」

わたしに背中向けてお洗濯しながらのおばあちゃまの声で、はつとした。いけない。考え込んでしまったみたい。

「な、なあに、おばあちゃま？」

あせつて応えたら、お洗濯しながら、顔だけくるとこちらに向いたわ。そのまま、じつとなにか見つめてる。その先には、わたしのポケット。ピンクのケータイがちょこつ、と顔のぞかせてる あ！

「またお友達、できたかい？」

いつもより、ちょっとにやにやして。ちょっとだ

け、子供みたいな顔で。 うん。

わたしは、もつ使えないケータイを取り出した。顔が、おもわず笑つちやう。

「ええ。おばあちゃま♡」

—おしまい—